

養護施設から世界が見える

園長 児嶋 草次郎

3月末からバタバタと日が過ぎていき、今日は4月4日（金）です。ようやく気持ちも落ち着いて来て、回りの自然をじっくり見つめる余裕が出て来ています。春です。見上げれば春爛漫！この春は、山桜の咲き始めるのが遅く、山桜、染井吉野、陽光桜、花桃と一緒に競い合うように開花しています。その他の木々や雑草も一斉に芽を吹き始めていて、萌える（燃える）という言葉がぴったりです。感性の豊かな人々の魂が、躍動する季節に入っていることに気付かされています。雑草の花、一輪一輪が美しい。

今日は、3月末からの子供たちにとって大事な行事を書きとめておきます。

3月20日（木）は、お別れ会でした。今年の高卒生は6名でした。高校生は、それぞれ「卒業論文」を在園生・職員たちの前で読み、今までの人生を振り返り、プラス思考で羽ばたく決意を言葉にします。普通の家庭の子供より2倍3倍苦勞し、また重い荷物を背負わされているのに、感謝の言葉が出て、志を持って運命を切り開いていこうとする思いが伝わって来た時には涙が出ます。皆、それぞれに、すばらしい文章を書きます。後援会「石井十次の会」の会長からは、お祝いの言葉と、お祝い金がいただけます。今年は、宮崎支部の役員の方が4、5名出席してくださいました。

以下は、私からのなむけの言葉です。

N子さん 大学進学おめでとう。あなたは心理士になる夢を描いています。大学卒業後さらに2年間、大学院で学ばねばなりません。先は長いけど、すでに先を走っているRさんがいる。時々連絡を取り合って、気持ちが途切れないようにしてください。

あなたが友愛園に来た頃（小学3年）の自信のなさそうな少女の姿は忘れられませんが、ここまでたくましく成長しました。しかし、運命を変えるためのほんとうの戦いは、今から始まると言ってよい。しっかり自戒自規の生活をして、これからもコツコツ努力を重ねていってください。忘れてならないのは、お母さんの存在です。2、3日前にお母さんも含めて、今後の親子の関係のあり方を話し合ったけど、お母さんとどう距離を取っていくかが課題です。お母さんも一人ぼっちだから淋しい。これから、あなたを頼ろうとし始める。しかし、あなたにはまだ経済的にも精神的にも、背負う力はありません。お母さんの希望に応えていたら、母子一緒にブクブクと湖の底に沈んでしまいます。今後、困った時は、いつでも職員を頼ってください。

E子さん 大学進学おめでとう。Eさんは社会福祉士を取って、施設で働きたいという夢を持っている。Eさんの力だったら必ず実現できる。期待して待っています。しかし、楽観はしていません。

Eさんの姉は、高校の先生になるという夢を持って大学に進学し卒業したけど、その夢を途中で捨ててしまいました。同じ大学に進学したSさんが、この春から小学校の先生になれることになったので、その大学のせいで夢が実現できなかったわけではない。優秀で模範生であったのになぜと考えたけど、やはり人間関係の失敗だったのだらうと思います。そういう弱さはEさんももっているか

もしれない。特に異性関係にはコントロールが必要です。園にはまだ二人の妹がいます。常に妹の存在を忘れず、二人の目標であり、模範であり続けてください。

お母さんはどこにいるのか分からないけど、5人の兄弟を作ってくれました。兄弟5人で力を合わせて励ましあって生きてほしい。

M子さん M子さんは他の5人と違ってしっかりとした御両親がおられます。なぜ自分は友愛園に来たのか、ここに来て色々考えたと思いますが、まだ、両親との関係が修復できたとは言えない。一番は、やはり人間関係のあり方についてもっと学ばねばならない。相手の気持ちを考えながら言動できるようにならなければなりません。

人間関係は互いの思いやりで成り立っています。その場その場で思いついた言葉をそのまま吐いてしまうと、相手を傷つけてしまうことがあります。

M子さんは茶臼原自然芸術館で働きます。実習で機織りが上手だとほめられました。これから階段を登るように、一つ一つ技術を習得して行ってほしいと思います。すばらしい力を秘めていると思いますので、これからもっと自信をもって、仕事に取り組んでください。

双子のT君・S君 今回は石井十次の会の方々も何人か出席してくださっていますので最初、ちょっと説明になります。2人は双子の兄弟です。兄のT君は保育士になるために宮崎市内の短大に進学し、弟のS君は社会福祉士になるために、延岡の大学に進学します。

しかし、今までの道のりは決して平坦ではありませんでした。生れ落ちてすぐ乳児院に入れられ、そこから児童養護施設に移され、小学低学年の頃に、里親さんの所で生活するようになります。しかし、そこには実子がいて差別され、関係が破綻してまた児童養護施設に入れられます。そこがこの友愛園でした。その時、小学4年生になっていました。生れ落ちて10年間は、ほんとに大人たちの都合に振り回されて来たのだと思います。二人は11月の収穫感謝祭の時の「労作作文」に、「人を信じることができなかった」と書きました。当然のことだろうと思います。「運命を変える」とは、二人のためにある言葉かもしれません。友愛園の「生活手帳」の表紙に、次のように書いてあります。

「毎日の修行（生活）が習慣を作り、習慣が心（自律心）を育て、心（自律心）が夢を引き寄せ、夢が運命を変える。運命が変われば人生が変わる。」

二人はここに来て夢ができました。T君は保育士になり、S君は社会福祉士になり、福祉のために社会貢献すること。きっとこれからがんばってその夢を実現してくれることと思いますが、不安がないわけではありません。先ほどの習慣や心の周辺で何か忘れ物をして来ているようにも感じます。人を信じられなくなった人間が、運命を変えることがいかに難しいことなのか、二人が証明してくれているようにも感じます。これからは二人とも自分なりの生活習慣を作って、しっかり自己コントロールして行ってほしいと思います。

二人にあやまらなければならないこともあります。ここに来てすぐ、生みのお母さんと再会させることはできたのに、その母子関係を再構築させることができなかったことです。お母さんには、随分働きかけをして来たけれど、重度障がいを抱えるお姉さんのお世話に集中しているせいか、結局、心を二人に向ける余裕はなかったようです。いつかの話の中で、お母さんを恨んでいないと返事してくれたことが一番うれしい。

お母さんが生んでくれなかったら、二人はこの世にはいない。感謝の気持は持たねばならない。

まず二人がそれぞれにしっかりと一人の社会人、大人として自立すること。そうすれば、同じ大人として、お母さんと冷静に向き合える日が来ると思う。しっかりとがんばってほしい。

N子さん N子さんは介護福祉士として高齢者施設への就職が決まっていますが、まだしばらくは

園から通いますので、はなむけの言葉は今回まだです。親族との間に裁判中で、まだあなたを守っていかねばなりません。背負っているものは、6人の中で一番重いかもかもしれません。がんばってください。

5名の高卒生たちは、3月末にそれぞれ、新たな世界へ飛び立っていきました。

3月24日(月)、岡山の大学を卒業し、宮崎県の教員採用試験に合格し、4月1日より赴任するS子さんが挨拶に来てくれました。私にとっては最高にうれしいことでした。地元の宮崎日日新聞も取材してくださり、3月30日の紙面で報道されました。

- ① 行政や学者たちの中で徐々に浸透していつている施設否定論に反論するために、このような情報発信は大事でしょう。世間の常識の中に眠る、偏見を改めることにもなります。つまり、施設でも子供たちは立派に育っているのです。
- ② 友愛園(社)の後輩たちの目標となります。学校の先生になることも、そんなに難しいことではなくなって来ました。過去10年間ほどの友愛園の子供たちの大学等への進学率は、平均58%で、「行きたい」と志せば行ける環境になっています。
- ③ 児童養護施設全体の大学等の進学率は20%~30%程度で低いものです。子供たちや職員たち自身に内なる偏見があるものとも思われます。志さえ養えば人は努力を始めるのです。新聞を読んだ他の施設の子供が自分もやれるかもしれないと思うことも重要なことです。
- ④ 家で虐待を受けたり、ネグレクト状態の中に置かれ、未来への希望を失って悶々としている子供たちにこのニュースが届いて、施設に入れば夢を実現できるかもしれないと、発想の転換をさせるチャンスにもなるかもかもしれません。こういうことは、日本だからできることです。

3月31日(月)から4月2日(水)まで、高校生6名と岡山に研修旅行に行つて来ました。名付けて「高校生自覚旅行」。毎年この時期に行つている恒例の行事で、コースは3コースあり、今年は岡山コースでした。志を養いリーダーとしての自覚を促すことが願いです。岡山孤児院のあつた岡山市内の門田屋敷・三友寺を訪ねたり、石井十次が最初に少年と出会つた上阿知村の診療所跡・大師堂を訪ねることが主な目的です。

3月31日(月)、朝5時すぎに、高校生6名と職員3名で、マイクロバスを貸し切り園をスタート。

いつものように、私は、子供たちが眠り始める前に、先ほどの小学校の先生になつたS子さんの記事をみんなに配り、上のような話をした後、次のように続けました。

何度も話しているように、国の政策が変り、子供をできるだけ施設に入れない方向で支援は進んでいる。家庭優先の原則で、施設より里親さんの所へやろうとする。普通の家庭環境の中で生活させれば、子供の弱さや悩みは、自然に解消され、幸せになれると、偉い人たちは信じているようだ。児童養護施設の子供たちの抱えている課題・問題は、そんなに単純で軽いものではないと思う。

それらを解消するには、やはり教育と鍛錬が必要だ。そうなつた時施設の役割というものが出て来る。みんなもS子さんに続いてほしいと思う。

そのためには「生活手帳」でしっかり自己分析して、自分の長所・短所を把握し、長所を伸ばし短所を克服する努力を重ねていかねばならない。志をしっかり持つてプライドと誇りを育てていかねばならない。

岡山孤児院のあつた所から宮崎まで何Kあるのか。事務所の人に調べてもらつたら、高速道路で661km、今回のように途中フェリーに乗つて四国回りで入つたら493kmだった。当時は小舟で瀬戸内海を港々に寄りながらの旅だから400km位かもしれない。

なぜこんな遠くまで、石井十次先生は施設を移そうと考へたのだろう。そこを考へるのが、今回の

旅行の目的かもしれない。

岡山孤児院の敷地も4ヘクタールくらいあったので、都会の施設としては、そんなに狭いわけではない。しかし、石井先生は、もっと広大で大自然豊かな中で、スケールの大きな人物を育てようと思ったのだと思う。大自然の中で農業をしながら自己鍛錬することで、感性も豊かになるし、忍耐力も身につく。

周囲の反対も押し切って石井先生は移住を決行した。しかし、移住が終了すると、燃え尽きるように亡くなってしまった。

その後、石井先生の理想をそのまま引き継ぐことができず、また戦争もあつたりして、時がすぎ荒れはてていった。

日本が戦争に敗けて、昭和20年に児嶋城一郎先生が事業を再開した。今年がそれから80周年となる。今の友愛園には、その歴史と教育と鍛錬の文化が残っている。そういう環境の中でみんなが志を育てることができることは幸せなことではないかと思う。

大分県臼杵港からフェリーで四国八幡浜に渡り、ひたすら高速で北へ向かい、伊予灘サービスエリアで昼食。四国でも山桜とソメイヨシノ桜が同時に咲いていました。瀬戸大橋を渡って岡山に入ると、この日は三友寺の岡山孤児院祈禱場跡の石碑を見せてもらい、その後岡山理科大学を見学させていただきました。小学校教員になったS子さんは、ここの教育学部を卒業しました。6名の中の2名がこの大学の理学部、情報学部をねらっています。丁寧に案内していただき感謝でした。

4月1日(木)には、まず診療所跡・大師堂を訪ねました。3年前と同じように、東森様他5、6名の「石井十次に学ぶ会」の皆様が迎えてくださり、高価な弁当までいただきました。ここが岡山孤児院発祥の地です。その後、岡山藩の藩校であった旧閑谷(しずたに)学校を見学。大原孫三郎氏の人格を知るためには、ここは欠かせません。3年後、もしまたここに来れたら、ここで論語の素読をやってみたい気がします。職員にも伝えました。

そして、午後からは倉敷市内にもどって、大原美術館を見学し、倉敷の古い町を散策し、みやげ物を買いました。大原美術館でも職員の方々があたたかく出迎えてくださり、子供たちもびっくりしていました。宿舎にもどって夕食の時、子供たち一人ひとりに印象に残った所を聞いてみましたが、やはり、それぞれ個性が違うように受け止めが違っていて、おもしろく感じました。

次の日は、朝8時前に宿舎を出て、ひたすら車は走り、5時半過ぎには無事に帰園することができました。

さて、本題はこれからと言ってもよいかもしれませんが。私は、この旅行に2冊の本を持参したのです。『グローバルサウスの逆襲』(池上彰 佐藤優)と『問題はロシアより、むしろアメリカだ』(エマニュエル・トッド 池上彰)です。行き帰り船の上で2時間以上過ごすことになりますので、一度読んだ本ではありますが、棒線を引いた所をたどるように読み返しました。

そうしたら、私たちの社会的養護(育)の世界とロシア・ウクライナ戦争とがつながったのです。私なりに解釈したことを、ここにまとめておきたいと思います。

ロシア・ウクライナ戦争とは、ロシアが一方向的にウクライナを侵略した戦争、つまり、ロシアの権威主義(独裁かもしれません。)と欧米の自由主義・民主主義との戦いとして位置づけられています。マスコミを通して私たちが知ることはそういうことです。欧米は一斉にロシアに経済的な制裁を加えましたが、ロシアは生き抜いています。グローバルサウスの国々が、裏でロシアとつながっているからのようです。なぜ?

フランス人エマニュエル・トッド氏は、ロシア・ウクライナ戦争は、家族的価値観の戦いでもある

と言われます。家族観の違いについては、佐藤優氏も指摘しています。個人主義・人権主義を基盤とする核家族的価値観が欧米であるとするならば、ロシアは父系制の伝統的家族観。ソ連崩壊後、アメリカは自由・民主主義の名のもとにこの家族的価値観までは押しつけて来たのです。それがグローバリゼーションです。

しかし、トッド氏は、アメリカ社会の現実を指摘されます。乳幼児の死亡率は、ロシアよりアメリカの方が高く、「虚無的で退廃的になっています。」（朝日新聞 2月 26 日付）。

ロシアのプーチン氏は「欧米は家族を破壊している」と批判しているとも。なぜグローバルサウスの国々がロシアに共鳴しているのかと言うと、核家族化した国々が全世界で 25%くらいで、70%くらいは伝統的な父系制の家族システムを保持しており、価値観としてロシアに近いわけです。

経済的なグローバリゼーションの陰に、このような価値観の戦争が行われているということは、今まであまり考えても見ませんでした。ここで、私たちの小さな社会的養護（育）の世界の大変革とつながります。

平成 29 年（2017）8 月 2 日に出された「新しい社会的養育ビジョン」は、まさにグローバリゼーションのまっただ中に、アメリカナイズされた政治家や学者たちによって作られたものです。アメリカの里親委託率の 75%に追いつくことが、世界標準に達することだという価値観を持った人たちです。トッド流に言うならば、「病んでいる」、佐藤氏流に言うならば、「狡（ずる）さと嘘」があるアメリカのシステムをそのまま導入しようとしているのです。

日本もほぼ核家族化してしまいましたが、家族の中の個人主義や権利主義をこのまま進めていけば、家庭はどうなっていくのか。プーチンが指摘しているように、「破壊」しかないのかもしれない。「子供の最善の利益」とか「子供の意見表明権」とか「子供まん中」とか、美しい言葉が政策の中にならびます。具体的には、学校で全生徒にアンケートで悩み等を聞き出そうとしたり、施設に意見表面支援員を定期的に派遣したりが始まっています。いじめ等の防止という面からは悪いことではありませんが、行き過ぎれば密告を奨励することになり、家庭も施設も「崩壊」しかねません。その先にあるのは、「虚無」であり「退廃」でしょう。

どうしたらよいのか。やはり我々の先人たちが築きあげて来た社会的養護のシステムを大事にすることです。家庭が（これは里親さんも同じです）崩壊したら、代わりに施設が養育を引き受ける体制はしっかり守っていかねばならないでしょう。アメリカ社会のように里親宅を転々とするような流れをつくってはいけません。日本には、大家族的な長屋的な、みんなで子供を育てる文化があったのです。世界の太谷翔平選手だって高校時代はルールの厳しい寮生活をしていますし、青山学院大学の駅伝選手だって寮生活をしながら、監督の奥さんのあたたかい料理で心を養っているのです。今、私たちは分岐点に立たされているのではないかと。